

十一月の俳句

(2021年11月)



目次

たべもの俳句	モロク俳句	歳時記俳句
11	7	1
）	）	）

<霜月>

季秋，深秋，晩秋，暮秋，秋冷，向寒，夜寒，落葉，初冬，初霜，霜月，雪待月，神楽月，神帰月，菊花，菊薫る，小春日和

(宇佐美保幸)メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに
巣鴨とげぬき徒然俳句

<https://blog-haiku.777usami.com>

ニュータウン無人交番神無月
腹ふくれへそも隠れて神無月
吾の影短く長く神無月
出雲までどこでもドアで神の旅
人の世はときに冷たき十一月

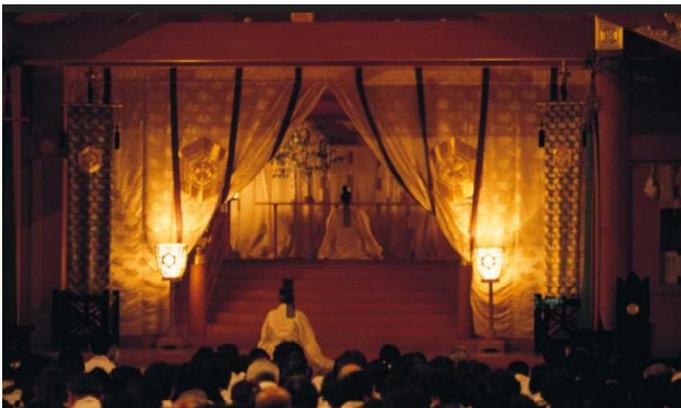
茶の花や何を考えうつむきて

デパ地下で弁当を買う文化の日
文化の日と進化失業者

文化とは子供に聞かれ文化の日
文化の日鍋をあれこれ磨き上げ

立ち食いの寿司屋の外は初時雨
さびしさのひとつ手前の初時雨

小春日や塩大福のお地藏さん
洗濯しベランダ飾り小春空



さびしさにやはり眼が行く石露の花
明るさに不安を抱き石露の花
つはぶきは静かに咲いて主張する
同じことまたつぶやいて石露の花
石露の花小さな庭に夜の闇
雨にぬれさらに石露黄をほどく

起床にも決心必要今朝の冬
レンタルの赤い自転車冬はじめ

初冬やスピードあげて逃げて行く
嫌みなく整形手術松手入れ

柳散る悲しみ押さえ柳散る
柗の花は個性か意固地かな
後付の言い訳空し花柗



滝のごと風も吹かないピラカンサ
木枯らしに屋台の提灯耐えている

いつまでも自分探しの帰り花
返り花世の中すべて勘違い

死に顔はどんな顔かと真夜時雨

山手線窓を流るる時雨かな
うんざりとまことしこやか時雨かな

おしなべて冬の桜は主張せず
冬ざくらの音なく山を装おいて

山茶花の白は儂き咲いている

無情にも山茶花垣根剪定し
山茶花が泣いているのか雨の朝

眠るため眠るためだよ寝酒かな



住職のいない古寺に紅葉散る
紅葉散る団地一斉大掃除

家周り落ち葉の掃除朝仕事
朝掃除夜にまた降る落葉かな
落葉これ大地が食べる地球かな
落葉踏む朝の散歩の団地かな
水のなきプールで泳ぐ枯れ葉かな
分が悪い三十路女に落葉かな

リベラルは滅ぶ世界の鎌鼬
リベラルは痩せるものなり鎌鼬

冬青空それは贅沢好き嫌い
許すもの選んで許す冬夕焼
星々を細かく碎き蓮枯れる

草枯れる会話は大事人ならば



枯野なりスマホ圏外風の音
年老いて無味乾燥の枯野かな

酉の市三度も通いただ眺め
吾も枯る蠹螂枯れて行く夜や
われもまたいずれいよいよ枯蠹螂
鬪志などとつくに捨てて枯蠹螂

魂を入れ替えろと八つ手咲く
庭隅に堂々鎮座花八ツ手
情報があふれて迷う花八つ手

冬の朝バス遅れずに生真面目に
うつすらと何を閉じ込め初氷
初氷何を伝える吾が脳に





モーロク俳句

さておいて十一月にモーロクす
神無月眩暈いろいろモーロクし
目眩こそモーロク証し神無月

モーロクし歩幅ばらつき石露の花

モーロクし八手の花を思ふなり
モーロクし行く先見ゆる花八つ手

モーロクしノスタルジアぞ紅葉散る
モーロクし自適と孤独木の葉髪

モーロクし棘も消えたか花柎
枯鷄頭いずれ我が身とモーロクし



モーロクし絆も無駄に冬林檎
モーロクし空想反復枯葉かな
モーロクし無駄な空想枯葉かな
モーロクし空想ばかり枯葉かな

モーロクし頼ることなく芒かな
モーロクしつい誘われて枯れ薄

モーロクし悟りきりたし蓮の骨
小春日や夢まだ醒めずモーロクす
ああ小春モーロクすれば涙して

山茶花や逃げたいだからモーロクす
山茶花や日暮は過去へモーロクし
山茶花の香り確かめモーロクす
山茶花やほろほろ暮れてモーロクす

モーロクは唐突にくる小夜時雨



モーロクし 螭螂 枯るや 我もまた

モーロクし 冥途へ つづく 冬紅葉
枯菊や 明日の 我が身か モーロクし

モーロクし 心ゆるめば 落葉かな

モーロクし 生生流転 落葉道

モーロクし 風といっしよに 落葉道

庭落葉 吹かるる ままに モーロクす

嵩落葉 モーロクすれば 自画自賛

モーロクし ノスタルジアぞ 冬桜

家を出ぬ 日々 モーロクの 枯れゆく 日

枯れきつて モーロクすれど 日の 匂ひ

枯れすすむ モーロクすれば 鳩の 群

水漬や モーロクすれば 鼻の 先

モーロクし 吐く息ごとに 水漬も



モーロクし傷つきやすくしやみする

モーロクし風任せなり枯芒
人生劇場モーロクすれば枯芒

蓮枯れてモーロクすれば我も枯れ
モーロクしうたた寝続く枇杷の花



たべもの俳句

金目鯛阿修羅のごとく目を開く
朝作るおにぎり三つ初時雨

太葱をたつぷりきざみチヂミかな
柚子効かせいりこ甘辛おかずみそ
沢庵のなき朝食はふぬけなり

沖縄の塩を合わせてしりしりを
冬が来て根菜たつぷり煮物かな

海鼠噛む入れ歯の調子良き日には
数本のセロリピクルス香りよく

冬に入り湯気立ち上る焼売を
鯛焼きや魚座の男夢想癖



茹で卵十一月は半熟で

九条葱たつぷり刻みつけうどん
根深汁男もできる老いてなお
ドライカレー冬の根菜刻みけり

道の駅焼き芋香る誘惑も
焼き芋を食いて女の政治かな

たこ焼きを食べてアフリカ冬来たる
老人ホーム鯛焼を買つてゆく
山眠るシチューの肉はほろり溶け

人参を人参らしくグラッセに
鮭加え具だくさん汁粕汁や
真実はどこにもないと石榴の実

カリフラワーレンジで作るピクルスを



なめらかにカリフラワーのポタージュを

冬めくやビビンバ混ぜるお焦げかな

冬紅葉静かに過ぎしミルクテイ

はんぺんかたまごかすじかおでんかな
味を変え奄美の塩で塩おでん

冬菜茹で平凡好む日常や

熱爛は無名でよかれ銘酒あり

熱爛を自由不自由追加する

暖簾よりやはり匂いだ焼鳥は

イタリア人「ほのポーノ！」焼鳥屋



